

広報TSB

第3号

平成25年8月1日発行

TOHOKU SEIKATSU BUNKA
UNIVERSITY & JUNIOR COLLEGE

本学の魅力を 広く伝えるために

東北生活文化大学・東北生活文化大学短期大学部

広報入試室長 加藤 浩文



本学のテレビCMをご覧になりましたか。「その手で夢を…」をテーマとして大学と短大の特色を表し、オープンキャンパスの日時を周知するCMを七月と八月に放映します。このCM放映と合わせて、在学生五人のインタビューの動画をWebで配信しています。インタビューでは、在学生たちが本学を選んだ理由や学科・専攻の特徴、高校生へのメッセージなどを語ってくれています。本学のホームページからリンクされているので、ぜひご覧ください。

広報活動は、本学の教育や研究、社会活動の内容を広く伝え、本学の知名度を上げるために重要です。また、学生募集活動においても効果的な広報活動が不可欠です。

本学では昨年度に広報課が新設され、これまで以上に二分化された広報活動を行える体制が整いました。昨年度からFacebookやTwitterの運用を開始し、きめ細かくタイムリーな情報発信をしています。テレビCMは昨年の秋に、本学では初めて放映しました。やはりテレビCMの効果は大きく、様々な反応がありました。

今回のテレビCMの特徴のひとつに、制作を生活美術学科の卒業生に依頼したことがあります。卒業生ゆえに本学の良いところをよく理解し、意欲的に制作してくれました(しかも、コストを抑えて)。卒業生がテレビCMを制作すること

は、「あのCMは自分たちの先輩がつくった！」ということ、在学生に対してもモチベーションを高める働きもあります。さらに、卒業生たち同士をつなげ、卒業生たちに現在の大学・短大への関心をもってもらうきっかけにもなります。実際、FacebookにCM制作の様子を載せたところ、これまで最大の反応がありました。

今回のテレビCMは、Web上の動画とつながりをもたせているのも特徴です。これは、クロスメディアあるいはメディアミックスと呼ばれる広報手法のひとつです。テレビCMでは十五秒という限られた時間で、本学の特色を印象的な映像で表現します。そして、視聴者の方々に対して、本学への興味を惹起し、Web動画へと誘導します。Web動画では、在学生の一人二分前後のインタビューによって、本学の特色や高校生へのメッセージを詳しく伝えます。Web動画は配信する期間を自由に設定できるのもメリットのひとつです。

このようなクロスメディアの広報によって、在学生の保護者をはじめ、高校生、高校の先生方の本学に対する興味・関心を高め、さらにオープンキャンパスの来場者数を増やしたいと考えています。オープンキャンパスは大学の授業や施設に直接触れ、大学の雰囲気や理解する貴重な機会です。本学においても、在学生の協力のもと、オープンキャンパスの充実化を進めています。

今年度の広報活動では、ここで述べた「テレビCM、動画の活用」のほかにも、「戦略的広報体制の強化」、「ワーク100ぶろぐ」などの学内外への広報、「広報TSBの内容充実」、「大学ポータルサイトの作成」などの活動計画があります。

本学には社会に広く伝えるべき豊かなコンテンツがあると自負しています。今後も多様な広報活動を展開して、本学の魅力を伝えることに努めますので、みなさまのご協力を賜れば幸いです。



2年間で
栄養士を目指そう

短期大学部 食物栄養学専攻スタート!

今春、短期大学部生活文化学科の生活学専攻を改編し、栄養士養成校の認可を受け、宮城県内では唯一の2年間で栄養士免許が取得できる食物栄養学専攻(定員40名)がスタートしました。

栄養士の中心業務は給食管理です。本専攻は、「安全でおいしい」食事提供ができる給食管理の知識と実践力を兼ね備えた栄養士を養成します。そのために、次の2つの特徴を持つカリキュラムを展開します。

「安全」については、食品衛生学実験の単位を基準の2倍に設定し、衛生管理について体験的に深く学習します。

「おいしさ」については、調理に関する実習科目を基準より45分間長く設定して、給食管理業務も取り入れた実習内容とし、調理技術の向上とともに栄養士としての即戦力を習得します。また、施設面でも、「作る」を学ぶ調理学実習室の他に「食べる」を学ぶ食生活実習室を新たに設け、食空間の充実が「おいしさ」や食事摂取率の上昇につながる重要な因子であることを学びます。

超高齢社会を迎えた我が国にとって重要な課題は、健康寿命の延伸です。ヒトの健康に携わる職業は、医師を始め、看護師、薬剤師など多々ありますが、その中で栄養士は生活習慣病予防から要介護状態の改善まで、それぞれに適応した食に直接に関わる専門職です。

第1期生42名は、それぞれが栄養士をめざして意欲的に学んでいます。年齢は10代から40代、性別は男女比が1対7とバラエティーに富んでいます。志は同じでも、世代、性別の違いが互いの学びに良い刺激となっているようです。2年間の本専攻での学びを経て、即戦力として活躍できる栄養士となって巣立つことを期待しています。



就職支援センターから

過去3年間の本学の進路状況は下表のとおりです。

種別	卒業年月	卒業生	就職希望者	就職状況			進学	家事手伝等
				決定者	未定者	決定率(%)		
大学	25.3卒	84	68	60	8	88.2	4	12
	24.3卒	82	65	52	13	80.0	6	11
	23.3卒	105	79	66	13	83.5	6	20
短大	25.3卒	78	74	73	1	98.6	0	4
	24.3卒	81	73	68	5	93.2	5	3
	23.3卒	71	55	53	2	96.4	2	14

大学・短大ともに、今春の卒業生がこの数年間では最も高い就職決定率を上げることができました。しかし、まだまだ大学生をめぐる就職環境は厳しいものがあります。

◎現代の就職環境を見据えて、保護者と学生との話し合いを!

お客様の就職について機会あるごとに話し合いをして、共通理解を図ってください。その際に、保護者として留意すべきことを一点申し上げます。それは、保護者の世代の経験がお客様の現在の就職には役に立たないことが多いということです。

一例を挙げますと、保護者が大学を卒業した1984年3月の大学数は460校で大学卒業生数は37万2247人でした。それに対して、2012年3月の大学数は783校で大学卒業生数は55万9030人です。大学が323校増え、大学卒業生数も18万6000人以上増えました。このことは、1984年当時に高校卒業生がしていた仕事にも、現在は大学卒業生が参入するようになったということです。しかも1984年ごろ、ユニクロで有名なファーストリテイリングは一地方企業でしたし、楽天という会社はまだ存在していませんでした。長期的にみると動きの早い社会では必ずしも大企業=安定、中小企業=不安定ではあるとは限りません。冷静に話し合ってみることが大切です。

大学家政学科

短 信



家政学科では、三月に助手の佐々木祐美先生、皆川百合先生、副手の朝倉朋美先生が退職されました。また、助手の松本有紀子先生が本学短期大学部へ異動されました。これにともなう、四月に助手の岩井綾先生、南城絵美先生、副手の千鳥恵里花先生が着任されました。そして、短期大学部から菅野修一先生が家政学科に異動されました。七月には助手の中川美希先生が着任され、現在、二十四名のスタッフで教育・研究に従事しています。

本学は、「地域の暮らしをデザインする力」を育む大学を目指しています。大学における教育・研究とともに、地域社会への貢献も大学の大きな使命です。家政学科でも、家政学という学問の特徴を活かした地域貢献活動を行っています。家政学は人間生活を研究の対象とする実践的な学問であり、研究の成果を日々の生活に直接還元できる特色もっています。このため、地域社会に対しても身近で直接的な貢献を行うことができ、最近の活動の例として、東日本大震災で被災された方々への支援活動を二つ紹介します。一つは、南



三陸町で津波によって流されてしまったわかめ養殖棚サンドバッグを服飾文化専攻の教員と学生が製作したプロジェクトです。もう一つは、健康栄養学専攻の教員と学生が仙台市内の仮設住宅で行った料理教室です。いずれも「服飾や」食の専門性が活かされた活動で、学生たちにとっても貴重な経験になったことと思います。家政学科では今後も様々な形で地域貢献活動をして参ります。

この「広報TSB」が皆様のお手許に届くのは八月だと思えます。大学は夏季休業の時期で、年生にとっては大学生活初めての夏休み、四年生にとっては最後の夏休みになります。学生たちが充実した休みを過ごして、九月に元気な姿でキャンパスに戻ってくることを楽しみにしています。

大学生生活美術学科

短 信



新学期が始まり、一年生は東京美術研修も無事終わり、大学生生活にも慣れてきたようです。

五月始めに長命館公園でさくら祭りがあり、「福興」するまプロジェクトのワークショップに四年生の一部と二年生の有志がボランティアで参加してくれました。

地元の子供を含む大勢の方々とコミュニケーションがとれ、今後継続して行われるワクワク100ぷる



じえくとを運営していく上で大きな力となってくださることを期待します。卒業生のライフワーク展、T家の恐るべき子どもたち展を始め、猫展、ワインラベルコンクール(二年相澤都恵入賞)、教員(森敏美、北折整、三上秀夫等)の個展、ギャラリイ越後や中本誠司現代美術館、ギャラリイエノマ等での個展・グループ展で学生、卒業生らの活躍が目立ちました。三年生もコース制に入り本格的に将来を見据え、選択したコースのカリキュラムに沿って勉学に励んでいます。四年生は就職活動も終盤に差し掛かり、論文や卒制にも力を注ぎながら大変な時期にきています。

夏季休暇ももう少しで突入ですが、それぞれ有意義に楽しんで後期に備えてほしいと思います。

短大生活文化学科

短 信



平成二十五年四月、食物栄養学専攻が正式にスタートし、食物栄養学専攻に四十二名、子ども生活専攻に六十五名、計百七名が入学しました。生活学専攻は二年生のみになりましたが、課題研究や就職活動に積極的に取り組んでおり、頼もしさを感じます。

また、学園附属のますみ幼稚園とますみ保育園は、本年度から短期大学の附属となりました。今後は幼稚園・保育園と短大の協力による充実した幼児教育とその実習を進めていきます。

今年度前期の主な行事を紹介いたします。

学科の行事

○四月六・七日 一年生オリエンテーションキャンプ、二年

生研修旅行(盛岡方面)

○六月十五日 体育祭

生活学専攻

○五月十四日 キャリアアップセミナーⅢ メイクアップ講座
油谷美恵子先生を招き、就職活動などに役立つ基本的なメイクの実習

○六月十四日 ウルト
ラン基金ヒーローキャラ
バンに参加
田谷プロ・子育て支援セン
ター共催の企画に参加。子ど
もたちに手作りのお菓子を
配りました。

○九月三・十八日 フー
ドエンタテイメントコー
ス産学連携講座
株式会社江陽ランドホ
テル 菓匠 三全で講習



食物栄養学専攻

○八月中旬 グループ単位で施設見学(短大附属ますみ
保育園)

○九月十七日 施設見学(栗原市南部中学校給食センター・
栗原市栗原中央病院)

実際の給食管理の現場を見学し、栄養士の業務について理解を深
めます。

子ども生活専攻

二年生の実習

○五月十四日 就職ガイダンス マナー講座



学生たちが、学んだ知識を持ってまちで様々な活動をしています。めざすは、まちの人たちの暮らしをワクワクさせるプロジェクトを100個、世の中に送り出すこと。まちの人が暮らしに求めるものを思いめぐらせながら、人々の声にヒントを得ながら、学生・教員がアイデアを持ち寄り、大切に大切に、カタチにしてい、学生にとっても、社会の中で「気づき」を得られる貴重な機会です。

「わかめ養殖棚サンドバッグ作り」



服飾文化専攻

南三陸町において震災で流
されてしまったわかめの養殖
棚用サンドバッグを製作。
普段はミシンで服を縫って
いる学生たちですが、スキル
を活かしたプロジェクトで
す。

「手軽に簡単料理教室」～たのしさ・おいしさ・うれしさの分かちあい」



健康栄養学専攻

昨年度に引き続き、今回
が5回目。味の素キッチン
カーを宮城野区鶴巻の
仮設住宅に持ち込み「手
軽に簡単料理教室」を開
催しました。

「福興(おこ)シダルマハガキを描こう」



生活美術学科

仙台市泉区の桜満開の長
命館公園「さくらまつり」に
て開催。地域住民で賑わ
い、このブースも大盛況。
さらに学生による「似顔
描きます」コーナーも子
どもたちに好評でした。

「ウルトラマンの被災地訪問と 連携した食育支援活動」



生活学専攻

今回は野菜を活用した
創作スイーツ、ウル
トラマンクッキーとグ
リーンピースチーズ
ケーキを製作し、ウル
トラマンゼロに会いに
来た子どもたちにプレ
ゼントしました。

「泥だんごあそびを楽しもう！ ～ピカピカだんご作りに挑戦～」



子ども生活専攻

虹の丘児童センター
主催のサマースク
ルを本学で企画、開
催。
泥遊びをしながら、ピ
カピカだんごの制作
を終始楽しい雰囲気
で進めました。

一年生の実習

○六月二十四、二十五日 幼稚園・保育所見学実習(短大
附属ますみ幼稚園・保育園)、施設見学実習(丘の家)こども
ホーム)

○九月初旬 幼稚園基礎実習Ⅰ(短大附属ますみ幼稚園)



大学服飾文化専攻 1年

六月十五日の体育祭で男子三名(木内将、斎藤澁稀、佐藤利幸)が大活躍し、バスケットボール、バレーボールでいずれも優勝を果たしました。女子はお揃いのユニフォームで登場し、周りの人たちに団結力の高さを披露してくれましたが、健闘及ばず試合には負けてしまいました。

入学してから約三ヶ月が経ちました。五月に行った個人面談では、友だちもでき、大学生活に慣れてきたと答えた人が多くいました。現在の心配は七月下旬から始まる前期試験ではないかと思えます。体調を崩さないようにして、最初の関門を真摯な態度で乗り越えてほしいと願っています。

大学服飾文化専攻 2年

現在、服飾文化専攻二年生は毎年行われる学内行事(ウエルカムパーティー・体育祭・オープンキャンパス・七夕)などの企画に対し、積極的に取り組んでいます。授業面では高度な専門科目の内容に悪戦苦闘していますが、毎日クラスメイトと切磋琢磨しながらこなしています。さて、これから前期末試験や九月の研修旅行、さらに十月に行われる大学祭の準備など数多くの予定を控えています。体調管理をしっかりして忙しい日々をなんとか乗り越えて欲しいと思えます。さらに今年は三年次進級の条件である六十二単位を修得しなければいけません。全員が進級できるように目配りをしていければと考えております。

四月に入学してから約三ヶ月。生活美術学科年次三十四名は、クラスの雰囲気もだいたい落ち着きが見られ、そして少しずつ二人の個性が出て来始めた頃でもあります。

大学生生活美術学科 1年

入学式後すぐのオリエンテーションキャンプや、五月には個人やグループで美術館・ギャラリー巡りの計画を立て研修に臨んだ東京研修旅行。六月の体育祭では、生活美術学科ならではの仮装・コスプレによる競技参加もあり、見応えあるものでした。

これから始まる後期の授業に向け各々の目標をしっかりと立て、一年生でしか体験できない大切な時間を送ってもらいたいと思えます。

大学生生活美術学科 2年

主観的な担任の自慢話と、お叱りを受けることを承知の上で、またクラスを褒めることにします。

授業に対する前向きな姿勢は、今も変わってはいません。私が担当する「美術鑑賞Ⅰ」は、残暑の厳しい関西方面での研修旅行(四泊五日+)を含むことから、本学科における最も過酷な授業の一つに上げられますが、今年度の履修率は、私が担当して以来、過去六年間の最高値をマークしました。授業への取り組みも、今まで指導したどのクラスよりも積極的であると感しています。

先日、開催された体育祭でも、その積極性が目を引きました。競技内での活躍ばかりでなく、競技外の体育祭企画「コスプレコンテスト」においても、注目を浴びた選手が多々いました。

美術を志す者にとって、不可欠な意欲と実行力も学力、技術力とともに成長したことを実感する今日この頃です。

大学生生活美術学科 3年

四月から、生活美術学科三年は次のような四つのコースに分かれてスタートしました。「アートな職人コース」「アティストコース」「アトインストラクターコース」「デザイナーコース」です。卒業後の将来を意識し、コースの特徴を生かした専門性を深めるものとなっています。

大学服飾文化専攻 3年

入学してから二年以上が経ち、もう三年生です。「早いなあ」とみんな話しています。

三年生になると、教職や学芸員といった資格・免許に関する科目が増え、各自の時間割は異なるようになります。服飾関連の専攻科目ではみんなが集まりますが、生活美術学科の科目を履修したり、基礎教育科目を二年生や二年生たちと一緒に受講する学生もいます。そろそろ卒業という大学生活のゴールが見えてきて、卒業後の進路についてもときどき話しています。これから卒業までの貴重な時間を十分に過ごしてほしいと願っています。

大学服飾文化専攻 4年

最終学年の前期、学習では免許や資格に必要な科目の取得と課題研究を残すのみとなり、教員免許の取得学生は五月から七月中旬にかけて二ヶ月間の教育実習に臨みます。二部学生は引き続き卒業に必要な単位の取得を目指し努力しているところです。また六月の体育祭では男子学生が主に参加し、男子バスケットで準備良かったしました。

四年生の活動の中心には就活があり、終盤戦に突入しています。クラスでは数名の内定者が出てきましたが、大半の学生は引き続き活動中で、不安と焦りを強く感じている学生が多いです。粘り強く活動を継続して行けるようにサポートしていければと思います。

大学健康栄養学専攻 1年

健康栄養学専攻では、四十名の新入生を迎えました。保護者の元を離れて一人暮らしを始める学生も多い中、ガイダンス、オリエンテーションキャンプ、健康診断、履修登録など次々に学事があり、生活環境の変化と授業に慣れる四月を過ごしたと思います。連休明けに行った個人面談では、学友会サークル活動へ加入した学生が多いことを知り嬉しく思いました。六月の体育祭は、あいにくの天気のため十分に力を発揮できずにいたようです。七月末の前期試験では、個人力を十分に発揮してもらいたいものです。

次に、外部の活動を紹介します。河北美術展の出品やグループ展への出品と積極的に参加しました。なかでも「みかん箱」展(会場メリラボ)は、このクラス有志による企画・展覧会で、多くの学生が参加しました。一人一人の個性が作品にあらわれクラスの全貌が見えたユニークな展覧会になりました。会場にお越しいただいたご父兄の方々には、籍に学んでいる仲間たちの雰囲気を感してもらえたのではないでしようか。

大学生生活美術学科 4年

現在三十二名在籍の四年次は、卒業に向けたハンドルのひとつである卒業論文の執筆に追われています。七月十三日には、卒業論文の中間審査があり、その後九月には論文提出と審査が控えています。また、五月から教員免許の取得を希望する学生の、宮城県内の中学校の三週間の教育実習が始まり、七月末には教員採用試験が待っています。さらには卒業制作の構想も進行中で、忙しい中様々なグループ展等にも出品している学生も居ます。

大学四年生がしなければならないことと言えば就職活動です。すでに内定をもらった学生もあり、学内でジョブサポーター(ハローワーク)の方に、就職に関する様々な相談をし、健闘中の学生たちがいます。担任として希望の職業に決まることを願っています。

短大食物栄養学専攻 1年

食物栄養学専攻第一期生は、四月入学式後に慌ただしく各種ガイダンス及び「百のオリエンテーション・キャンプ」を終え、全員が栄養士を目指して日々勉学に励んでいます。六月中旬に行われた体育祭では、自分たちでデザインしたお揃いのシャツを身に着け、リレー二位及び総合優勝を達成し、クラスの団結力が高まったように思われます。

現在は、前期末試験に向けて層勉強に力を入れていると同時に、夏期休業期間に実施される各種施設見学の準備をしています。二年次の給食管理校外実習に備え、より明確な目的意識を持つことを期待しております。

短大子ども生活専攻 1年

入学から四ヶ月を迎えようとしている六十五名の学生たちは、オ

大学健康栄養学専攻 2年

六月一日の後援会総会、懇談会・個別面談にご参加いただき御礼申し上げます。個別面談では、ご家庭での様子などを知ることができ、大変参考になりました。今度とも保護者の皆様と協力して、クラス運営を行って参りたいと思えます。

クラスの様子としては、専門科目の講義や課題が増え、より勉強に取り組み時間が増えて参りました。八月上旬までテストや課題がありますので、頑張つて取り組んでもらいたいと思います。また、学友会役員や体育祭の実行委員などの活動も増えております。特に体育祭では、競技に出場しつつ、試合の準備など裏方の作業を熱心に行っていました。エキシビジョンマッチではバレー、バスケット、フットサルの真剣勝負を行い、放課後にいかに練習を行っているのか伺うことができました。

大学健康栄養学専攻 3年

健康栄養学専攻三年生で特筆すべきは、まず、臨地実習が始まったことです。クラスの三分の二の学生が先陣を切つて六月末に小・中学校や給食センターに出向き、初めての校外実習に戸惑いながらも、多くの有意義な経験とともに戻ってきました。また、四月から管理栄養士国家試験対策セミナーもスタートし、再来年三月に向けての長い道のりを歩み始めました。

学友会活動でもこれまで積んできた経験をもとに、新たに好きな活動を始めたり、数々の行事の運営で指導的役割を發揮したりで、学業ともども今後ますます活躍してくれることを期待しています。

大学健康栄養学専攻 4年

健康栄養学専攻四年生は、学業と就職活動に没頭する日々を送っています。五月から教育実習と保健所での臨地実習、七月からは病院での臨地実習が始まりました。また、管理栄養士国家試験の模擬試験が毎月二回行われており、国家試験合格に向けて勉強に励んでいます。就職活動については、内定を獲得した学生も出ております。

このように忙しい毎日ですが、六月の体育祭ではバスケットボールで女子が優勝、男子は準優勝と大活躍でした。

大学生活最後の一年が充実したものとなるよう、教職員は学生た

りエンターテインメントや体育祭などの行事を経て、とても打ち解けた雰囲気になってきています。特に六月に行われた体育祭では、短大一年生が総合優勝を果たしました。これを見てもクラスの団結がどんどん高まりつつあるように思います。現在は大学祭で行われる「ファンタジーランド」の準備に向けて、自分たちで考えながら少しずつ準備を始めているところです。皆で協力して話し合いより良いものを創り出すとする姿は、未来の保育者として頼もしいばかりです。

短大の二年間は、あつという間に流れていきます。その中で同じ志をもつ仲間同士が、保育者として人間として深く学びあつて欲しいと願っております。

短大子ども生活専攻 2年

二年生は四月初より実習に向けての活動が目白押しでした。五月末から二週間の保育実習Ⅰを経験し、次の実習Ⅱに向けて二週間短大で授業を受け、空き時間を利用して、教材研究や教材準備に専念して、再び六月に実習Ⅱに挑戦しています。その間、体育祭に参加するなど、パワー全開で学生生活を謳歌していました。七月には施設実習を経験します。

実習中も、友達同士声かけあつて生活する姿が見受けられます。授業に実習に忙しい今が人生で最も大切な瞬間です。社会人に相応しい力を身に付けて欲しいと願っています。

短大生活学専攻 2年

六人の学生は授業と課題研究、さらに就職活動と各自が掲げた目標に向かって懸命に取り組んでいます。課題研究は大学の卒業論文・制作にあたりますが、短大部では選択科目ながら家政系最後となる本専攻のみで開講されており、嬉しいことに全員が履修しています。六月には子育て・家庭支援センターのびのびくらぶにて「ワクワク100ぷるしえくと」の環としてウルトラマンゼビオンと「ワクワク」を企画し、課題研究で創作した野菜や地場産品を用いたオリジナルスイーツを来場した子どもたちにプレゼントしました。自分の可能性を信じ、頑張る彼女たちをこれからも応援したいと思えます。



大学生生活美術学科 教授 森 敏夫

専門分野: 壁画
主な担当科目: 基礎絵画Ⅰ・Ⅱ、洋画Ⅰ・Ⅱ、壁画Ⅰ・Ⅱ

学部は油画で、大学院は絵画科壁画研究室に所属し、モザイク、フレスコ、ステンドグラスを専攻しました。

古典技法としてのそれぞれのジャンルですが、共通項は建築に深くかかわるもので、建築アートとして空間を支配する芸術であり、装飾をメインとしたり、あるときはメッセージを伝えるメディアとしての壁画でもあったのです。どちらにしろ、美術館や画廊で見てもうアートというよりは、本来不特定多数の衆に見てもらえるアートの特質を持っていると思います。

仙台に来てからは、学校や公共建築物の壁画等に取り付ける制作をメインに行っていました。10数年前からは、様々な素材で表現することを模索し、従来の壁画等の技法に加え、ミクストメディアとして、スチール缶やアルミ缶を焼成し、鍛金的な作業を加えパネル等に貼り付け表現する独自の発表を行っています。

震災以降、そういった作業に加え、様々な人々に参加してもらい作り上げる様な参加型アートの分野も模索しています。

これは、美術系の学生や高校生だけでなく子供も一般の大人の方も参加し作れるようなワークショップや、一つのコンセプトで作り上げる作品に関わることでアートの幅広さを実感できるような作品作りも含まれます。

個人では、今までの制作したジャンルの精査と、未だ関わっていない表現の可能性を探り、新しい分野、形の作品を制作発表して行くことが、今後の自分に対するスキルアップに繋がっていくものと思います。

また、そうすることで自分の制作スタイルを展覧会等で観て頂き、特に学生や若いアーティストたちに何らかの形で活かしてもらえることを期待します。

私たち教員、アーティストはいろいろな意味で次世代の懸け橋になる様な役割になれればと考えています。



大学家政学科 教授 土井 豊

専門分野: 保健体育、学校保健、健康管理学
主な担当科目: スポーツ、スポーツ身体科学、健康管理概論、学校保健

私の専門は、保健体育、学校保健、健康管理学といった、いわゆる日々の生活に密着した科目であります。大学(宮城教育大学)・大学院(順天堂大学)を通して、また大学教員になってからも、運動と体力、あるいは生活習慣と健康との関わり等についての研究を行ってきました。

ところで、私が本学に赴任した頃(1986年)は、大学・短大共に女子の学び舎であり、初期の頃はほぼ女子学生を対象とした教育・研究活動でありました。また当時は、夕方暗くなれば学生の姿を殆ど見かけなくなる大学だったので、まずは運動部の活動を盛んにすることを目標に、バスケットボールやバレーボールクラブを新たに創り、部員たちと共に汗したことが、今でも鮮明に思い起こされます。その後は、次第に講義終了後も大学に残って何らかの活動に励む学生が多くなり、しかも翌1987年からは大学が男女共学となったこともあり、私の研究に興味・関心を抱く学生を取り込んでいくには色々な研究を行ってきました。そして時には、東北学校保健学会や東北公衆衛生学会といった地方学会に演題を申し込んで共同発表もしてきました。中でも忘れられない研究発表としては、「健康的な痩身方法に関する実証的研究」や「痩身に伴う身体的・精神的ストレスに関する基礎的研究」があります。これらの研究により、巷に多い食事制限型ダイエットは効果があるように見えて、実は(身体を肥りやすい体質に変えてしまう愚かな方法である)ことを証明できたことは実に貴重な経験でありました。何と云っても、無事発表を終えることができた学生の満足しきった笑顔が今でも忘れられません。

何はともあれ、今後共に、多くの学生たちから「入学して良かった!」と言って貰えるような教育・指導を行っていくことが重要であると自覚しつつ、とにかく学生たちと一緒に成長していける教員でありたいと決意しております。

私の研究



短大 生活文化学科 講師 益田 裕司

専門分野: 給食管理学
主な担当科目: 給食管理学、給食管理実習、給食管理基礎演習、栄養士基礎演習

今年度、短期大学部の生活文化学科では、食物栄養学専攻を新設し、栄養士養成施設として稼働し始めたところですが、その中で私は「給食管理学・実習・演習」を担当させていただいております。それまでの私は、主に病院の管理栄養士として臨床の現場で、患者さんの栄養ケアを行っていました。単に栄養ケアと言っても実際は様々な角度からアプローチすることが出来ますが、その中でも私が多く関わったのは、経口栄養摂取を目標とした食事提供法の検討でした。口から食事が摂れなくなってしまう原因としては、疾患や事故の影響により摂食機能障害が出るものや、先天的にその機能に障害があるもの、更には認知機能に問題があって摂食から嚥下までスムーズに行えず、重度の誤嚥を起こすリスクが高い方など様々です。

摂食嚥下や誤嚥リスクに問題ない人は、当たり前のように口から食事を摂りますが、そうでない人は、経口摂取以外の方法で検討せざるを得ません。口から摂る食事は消化管を最大限に使った栄養摂取法なので、栄養の消化吸収もよく、健康の維持増進は行ないやすい状態になります。更に、嚥下ことによって料理の味や食感を感じ、食事を摂るという欲求を満たすことができ、気持ちも余裕もしてくれそうです。つまり栄養士としては可能な限り経口摂取を維持させることが目標となります。

食事を提供するという仕事の中でも、給食施設というのは「特定かつ多数の者に対し、継続的に食事を提供する施設」とされています。食事を提供する対象者は健常者もいれば、そうでない人もいます。栄養士の役割は、いかに安全で美味しく、必要な栄養(食事)を提供できるかにあります。給食という食事の提供スタイルを通して、対象者のニーズをつかみ、それに応える食事を提案できる栄養士を育成したいと考えております。



大学家政学科 講師 小野 寺 美和

専門分野: アパレル感性工学、被服衛生学
主な担当科目: 色彩学、被服学、アパレル設計生産論など

私のこれまでの研究内容ですが、大きく分けて2分野(1.被服衛生学、2.アパレル感性工学)について研究をしてきました。1.では、人体の生理的体温調節、衣服内気候、温冷感、通気性、熱移動特性について様々な研究をしてきました。実験内容は、アパレル製品を着用したときの暑さ寒さ、圧迫、肌触り等の心理量・生理量に関する測定・評価を行い、これらについて解析するというものでした。例えば、①熱電対型温度測定器による皮膚温の測定(接触型)、②温熱的官能量と衣服内温湿度との関連、③衣服圧と圧迫感との関連でした。2.では、婦人用衣服、審美性、感性、幾何学文様などについて研究をしました。特に、幾何学模様の研究では、衣服用幾何学模様の設計に役立つ基礎的資料を得るために、縞模様・格子模様・円模様(水玉模様)・正弦波曲線群模様の4種を取り上げ、これら模様の大きさ、配置、配列、色彩などの構成要素が視感に及ぼす影響を、感性工学的観点から解明するという内容でした。現在の研究はその応用として、奈良県にある世界遺産の法隆寺や正倉院の宝物や、また日本三大餅の久留米餅、琉球餅、伊予餅などに見受けられる文様に着目し、これら文様の構成要素が視感に及ぼす影響を解明すると同時に、現代衣服に応用するための設計指針の提案を考えております。加えて幾何学模様の錯視・錯覚・色彩を利用した婦人用衣服の審美性の解明にも力をいれていきたいと思っております。この研究は衣服を環境として捉えるなどの学問的なことは勿論、地域産業と伝統繊維産業の活性化に繋がっていくものと考えております。

入学式

四月四日(木)午前十時、来賓の方々及び新入生の保護者のご臨席をいただき、平成二十五年入学式が大学体育館で厳粛に挙行されました。開式の辞に続いて、大学九名、短期大学部一〇七名、大学三年次への編入学一名、合計一九九名が学長から入学を許可されました。

秋葉征夫学長は、式辞の中で新入生に期待することを二点述べました。第一点は、この世界の多様性、すなわち社会の多様性、文化の多様性、人々の多様性、考え方の多様性、物事の多様性について学び取ってほしいと説きました。そして多様性を自律的に受け入れるために自分自身というタンスの中に「引き出しを数多く作る」ことに努力する必要があることを具体例を挙げながら述べました。第二点は、学生時代を通して多くの人と触れ合って、人間性ある人は人間力をしっかりと身に付けてほしいと希望しました。先行き不透明な二十一世紀を生きていく若人には、特に東日本大震災からの復興を担うために、復興にどう関わられるかを自問自答していくことが大切であり、その基盤になる「人間力」を、この二年間あるいは四年間に身に付けてもらいたいと期待しました。

浅尾豊信理事長挨拶、宮澤利彰後援会長祝辞(代読)と続き、家政学部長健康栄養学専攻の小野夏樹さんが、「建学の精神にのっとり、大学生の自分を自覚して熱心に勉学に励み、有意義な学生生活を送ることを誓います」と入学生を代表して宣誓し、入学式を終りました。

新入生は体育館入口で記念撮影後、学科ごとのホールに移動しました。新入生のほとんど全員が入学式に出席し、これから始まる夢多き学生生活のスタートラインに立ったことを実感しているような晴れやかな表情でした。



大学・短大後援会総会

六月一日(土)、午前十時から大学・短大後援会の役員会が百周年記念棟会議室で開催されました。平成二十四年度事業報告、決算、監査報告、本年度の事業計画案、予算案、役員人事が、事務局提案のとおり承認されました。そして、会場を百周年記念ホールに移して午前十一時から総会が開催されました。総会においても事務局提案の議事は、原案通り承認していただきました。

昨年度までは、午前十一時からの役員会、午後時からの総会開催でしたが、今年度から、午後後に担任との個別面談会の時間を確保するために、時間を変更しました。

総会出席者には、軽食とペットボトルの飲料をお渡ししました。午後時から、学科、専攻別懇談会に移り、さらに午後四時四十五分から担任との個別面談会を実施しました。総会の保護者の出席者数は五七名(昨年度四九名)でしたが、学科・専攻別懇談会出席者数は七六名(四六名)と増加し、個別面談会出席者数七〇名で、個別面談会の設定が今後の後援会の新しい方向性を示したものと見えです。個別面談の待ち時間には、家政学科健康栄養学専攻では担任以外の教員との懇談が行われたり、短大では学科の教育活動を紹介するビデオを流したりするなど、これまではなかった試みも行われ、意義ある保護者と教職員との情報交換になりました。

体育祭／学友会活動

四月二十五日(木)、避難訓練の後、体育館で学友会総会が開かれました。前年度活動報告、決算、監査報告、事業計画案、予算案が原案通り承認されました。その後、学園の施設設備や福利厚生について学生から数多くの要望が述べられ、それに対して学長から丁寧な説明が行われました。

さて、学友会新執行部にとって最初の大きな行事は体育祭でした。「Mishimachi」お金じゃ買えない勝ちがある」をテーマに、六

人事異動

退職の先生(3月31日)			
大学	教授 林 範親	助手 皆川 百合	
	教授 近江 恵美子	副手 朝倉 朋美	
	講師 渡邊 圭介	短大 副手 藤本 このみ	
	助手 松本 有紀子	副手 大谷 紗絵	
	助手 佐々木 祐美	副手 五十嵐 由	
新任の先生(4月1日)			
大学	助教 立花 布美子	短大 教授 齋藤 紀行	
	助手 岩井 綾	講師 益田 裕司	
	助手 南城 絵美	助手(再任) 松本 有紀子	
	副手 千鳥 恵理花	助手 副島 エリカ	
	助手 中川 美希 (7月1日)	助手 岡部 美喜子	
		事務補佐員 藤本 このみ (職員再任/12月31日まで)	

月十五日(土)に開催されました。あいにくの雨のため屋外でのドッジボールは中止となりましたが、体育館でのバレーボールとバスケットボール、グラウンドでの運動会リレーとガチリレーを実施しました。エフフォーエムをそろえた四年生、毎年恒例の仮装で大いに雰囲気盛り上げた生活美術学科など、楽しい中にも勝利を目指してチーム丸となつて競技が行われた体育祭でした。総合優勝は短大二年生でした。二年生にとっては、この体育祭でクラスの団結の輪が層強まったことだろうと思えます。競技終了後、後夜祭が行われ、最後に実行委員長を胴上げして皆で感謝の意を表しました。大きな負傷者もなく、体育祭が無事終了しました。

